
小さき王

鈴ノ風

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さき王

【Nコード】

N7912Z

【作者名】

鈴ノ風

【あらすじ】

百年に一度行なわれる魔王と勇者の戦い。だがその年、勇者はやってこなかった。痺れを切らした魔王は森を飛び出す。彼は一体どうなるのか？

プロローグ（前書き）

この作品には、駄文乱文、中途半端なシリアス、中途半端なコメディ、中途半端な設定、等々で作られています。

それらが許せない方は、タブかウィンドウを閉じてください。

プロローグ

百年に一度、勇者と魔王の戦いが行なわれる。

森の奥地に建てられた、巨大な城。そこに住まう魔王と、それを対峙する為、国中から選びぬかれた勇者。

魔王が負けるか、勇者が負けるか、それはその年によって違う。

だが、例えどちらが負けようと、その先は同じ。

魔王の軍勢は人里から去っていき、人間の軍隊もまた、魔王の土地から去ってゆく。

魔王と勇者の戦いは、正義と邪悪の戦いではなく、破滅と希望の戦いでもない。

実のところ、その戦いは互いの関係を維持する為の、儀式に過ぎない。

何年も何年も、続けられた儀式。

どのような天変地異が起ころうと、欠かすことなどなかった。だからこそ、その年。

最早何十回目になるかも分からない約束の年。

最早何十回目になるかも分からない戦いが、始まる

筈で、あった。

*

「遅い」

昼間、太陽光に照らされた巨大な椅子に座りながら、俺は呟いていた。

俺の呟きを聞いて、周りにいた臣下や兵士たちが動きを止める。

「遅い」

もう一度言う。

本当に、遅い。

百年に一度のこの年、本来なら国中から選ばれたたった一人の勇者が、お供を連れ、立派な剣を持ってこの魔王城へ乗り込んでくるはずだ。

それがいつなのかは年によって違う。春であつたり、夏であつたり、秋であつたり。

ただ冬だけは、皆寒いからと言ってこなかったか。

「遅い、遅すぎる」

周りにいた者達のため息をつく。呆れではなく同意の。

今の季節は春。東の国から取り寄せた木が、淡いピンクの花を咲かせている。

ただ、勘違いしないでもらいたい。今は百年目の春ではない。

「もう年を越してしまつたぞ！ 完全に遅刻ではないか！」

そう、これは百一年目の春なのだ。

勇者の選定が遅れたとか、飢饉があつたとか、戦争があつたとかでも最早許されない。都合が悪いのなら使いを超越す手はずになつていたのだ、それもしないのならただの遅刻と判断されてしかるべき。

「ああ、クソ」

「陛下。そのような汚らしい言葉遣いは……」

臣下の一人が、俺を咎めてきた。

「だがな、いくらなんでも遅すぎる！ もう春だぞ！ 桜が咲いたんだぞ！ 言葉も汚くなるわ！」

まあ普段から綺麗とは言いがたいのだが。それはさておき。

「陛下、どうしましょうか？」

俺を咎めたのとは別の臣下が聞いてきた。

「どうもこうも、年が過ぎた以上すっぱかされたと判断するのが妥当だろうな」

「そんな……」

呆れと失望とが混ざり合った表情を浮かべる。気持ちは分かるが、もう少し表情を抑えようとしないのかこいつは。露骨過ぎるぞ。

「じゃあどうします？ 攻め込みますか？」

そういったのは臣下ではなく兵士。背負った大剣の柄に手を伸ばしながら言う。

「やめい。血気盛んな奴だな、戦争するつもりか？」

「当然でしょう！ 約束破ったんですよ人間は。あいつら俺等の事舐めてるんですよ、だから思い知らしてやらないと！」

「……………」

そついや、こいつ百歳になつてないんだったか。

「はあ。誰かこの若造をつまみ出せ」

「ちよつ、陛下！」

「陛下」

若い兵士は他の屈強な者たちに引き摺られ、窓からポイツと捨てられた。

一応、ここ二十階ぐらいの高さはあるんだが、あいつ飛べるのかな？

「まあいいや。それで、何だ？」

話し掛けてきたのは年老いた臣下。実年齢なら俺のほうが遥かに上だが、経験、知識ともに優れており、頼りになる奴だ。

「はい。あの兵士の言う事も、もっともではないかと私は思うのです」

「お前さん飛べなかつたよな。なら骨くらいは拾つてやる」

「いやいやいや、もう少し話を聞いてください！」

先ほど兵士を放り投げたものたちが、今度は年老いた臣下の肩をつかんだ。

ああは言ったものの、こいつの言葉は頼りになる。俺はノリの良い彼らに手で放すように指示し、臣下に話を続けるよう言った。

「で？」

「はい。私も別に戦おうと言いたいわけではありません。ただ人間の

町に様子を見に行くべきだと思うのです」

「ほう。それは何故？」

「魔王陛下と勇者の戦いが始まって何千年と経ちました。ですがただの一度として、勇者が遅刻した事はありません。『遅れるかもしれない』という言伝が来ても、結局は遅れませんでした」

「ふむ」

「ですが今年はそうではない。勇者は来ず、使いも来ない。これは何かあったと判断するべきでしょう」

「つまりその『何か』を調べるべきだ、とお前は言いたいのか？」

「っは」

なるほど。こいつの言う事もっともだ。

「そうだな。では偵察に行くとするか」

「っは。あと偵察隊の候補なのですが……………え？」

「何か？」

「いえ、あの、陛下？ 今なんと？」

「様子見に行こうと、言ったんだが？」

「それは、その、陛下も参加する、ということですか？」

「ん？ ああ、それは無いから安心しろ」

「よかった。また陛下が騒動起こそうと考えているのかと」

またって、失礼な。

「はあ…………そう言うわけだから、連れはいらんぞ」

「ではお一人で参るのですね……………ってまさか一人で良く気があんた！？」

敬語忘れてるぞ。

「さっきからそう言ってるじゃないか。文句あるのか？」

「ありますよ当然！ 魔王陛下ともあろうお方が警護もつけず外出するなど！」

「だが、俺はこれから偵察に行くんだぞ？ 様子見をするなら忍ぶべきだ。なら人数は少ないほうが良い。一人だとなお良い」

「ですが！ そもそも！ 陛下自らが行く必要は！」

「向こうで何が起こるか分からん。この中で一番戦闘力があるのは俺だ。一人二人なら、強い奴を選ぶのは当然だろ？」

「しかし」

「それとも、お前まさか俺の妹を行かせるつもりか？」

「いや、そんな破綻しかないような事は流石にしません」

「だろ。なら決定」

「お待ちください陛下！」

他の臣下や兵士たちも、彼の叫びに反応して俺を止めようとする。こちらを包囲しようとするもの、扉に集まるもの。大まかに分ければその二つ。

が、先ほども言ったとおり、この城で一番強いのはこの俺だ。臣下が兵士が何人取り囲んで来ようが、俺を止められはしない。

俺を止めたくば妹を連れてくるしか無いが、あいつは今地下室で熟睡中だ。俺以外の者が起こす＝死ななだから、あいつが出てくる事は無い。

そして。

「あら、よっと」

俺が目指すのは扉ではないので、そちらの者たちはそもそも無意味。

そして俺は潜り抜けた。

若い兵士が落ちていった、窓を。

「へ、陛下あ！」

誰かの叫びが聞えてくるが、気にしない気にしない。

遙か下で誰かが伸びていたが、気にしない気にしない。

それでも飛ぶ術なら会得してるし。地面に激突して誰かさんみたいになることは無い。

「お戻りください！ 陛下！」

叫びというか、最早喉をからしそうな騒音は無視し、空を飛ぶ。翼とかは持っていないけど、あまり関係はない。

「そんじゃ、行ってくるわ」

一瞬で小さくなった魔王城へ、俺はそう言った。

さて、街は東……だったよな？

プロローグ（後書き）

どうも、初めまして、お久しぶりです。

鈴ノ風と申します。

いやー、新作です。実はクリスマススイブには上げるつもりのものでした。はい、一日遅れです。

とりあえず、誤字脱字、批判等ありましたら、遠慮せず感想に書いてください。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7912z/>

小さき王

2011年12月25日14時52分発行